

## 『水』に関わる地名の由来について【輪之内町編】

- 当管内の大垣市、安八町、輪之内町は、西南濃地方に属し、昔から、美味しく綺麗な水が自然に地下から湧き出し、水と共に発展してきた地域です。しかし、その一方で地形的特徴から、「洪水常襲地域」とも言われ、常に洪水に見舞われ、水に苦しめられてきた地域でもあります。度々、洪水に襲われていた先祖の人々は、今から約400年前、洪水から生命と財産を守るため、周りの人々と共同になって、自分たちの家の周りに「輪中」と呼ばれる堤防を築きました。こうした歴史背景を下に、今回、水に関わる地名のいわれを、書籍「水都大垣の地名」（大垣市地名研究会編著）や、地元の有識者の方々からの聞き取りなどを参考として整理しました。

わのうちちょう

### 【輪之内町の地名由来】

- 輪之内とは、輪の中のことを言います。水害を防ぐために、堤防で村の周りをぐるりと囲んだ輪の中を「輪中」と言い、輪の内と読んでいました。昭和29年に、福束輪中の福束、大藪、仁木の三町村が合併し、その時、江戸期から日常的に使っていた「輪の内」という言葉を、そのまま新しい町名としました。

※ 御囲堤とは、徳川家康が慶長14年（1609）犬山より弥富までの50Km区間に渡って築造した長大な堤防。当初は、名古屋城防衛という軍事上の目的として設置されましたが、その後は、尾張国の水防に効果を発揮した堤防。

江戸時代（1600年頃）の輪中とお囲堤



写真：福束輪中堤（十連坊）（昭和31年撮影 河合孝氏提供）



# ■福束輪中（福束・仁木・大藪）の成り立ち

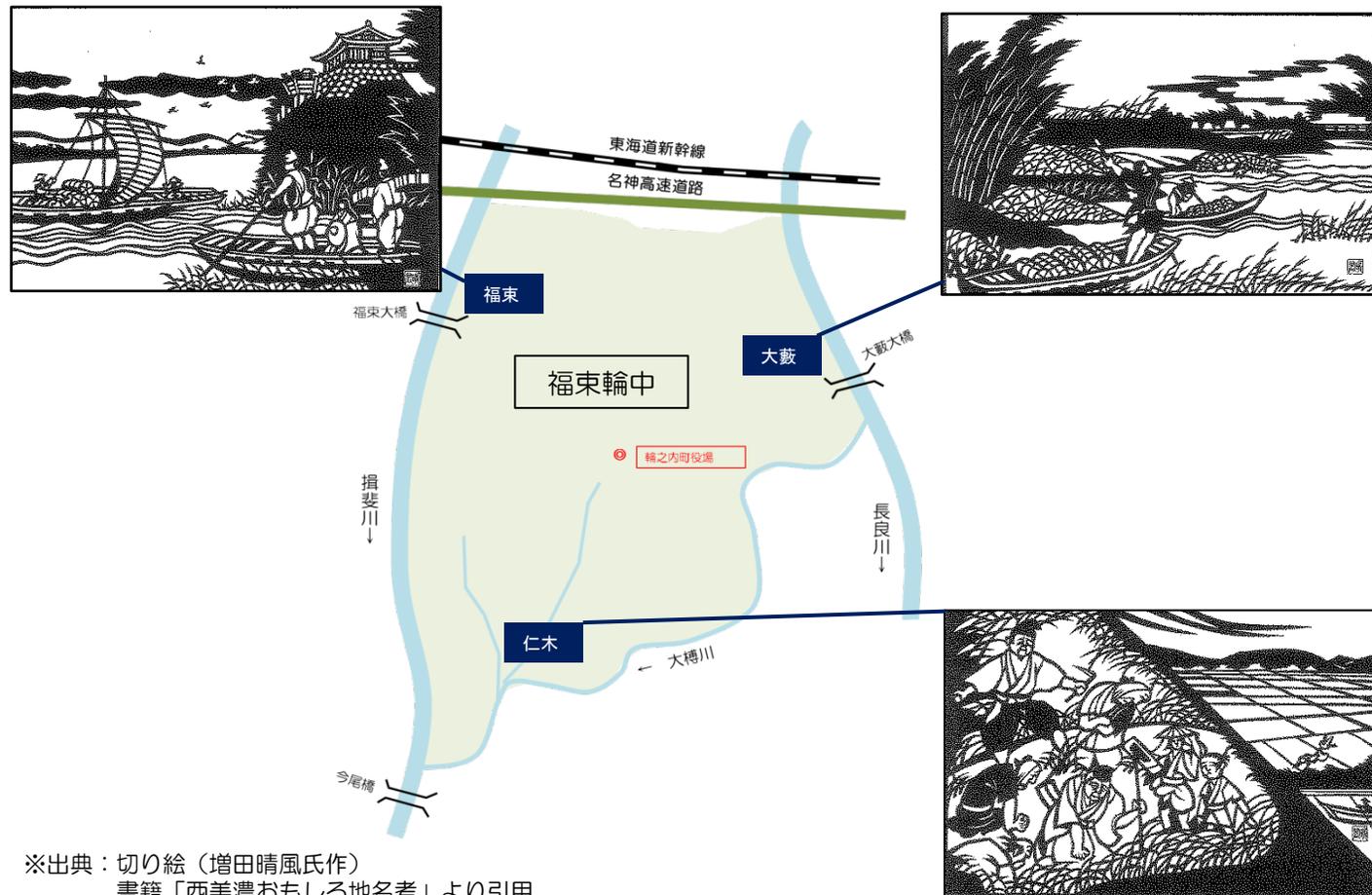
- 江戸時代、福束村が最も集落が大きかったため、ここを「福束輪中」と呼ぶようになりました。特に福束は、関ヶ原合戦のとき、丸毛氏二万石の城下であり、西美濃の河湊（船附・栗笠・烏江）に近く、牛屋川（水門川）によって大垣に通じる要地でもありました

- 「福束」は、もともと、古代にさかのぼると、水の噴く塚で「噴塚」であり、川を伏流した自噴水のある避難塚であったようです。墓を指す「塚」よりも福を束ねる方が縁起が良いことから、福束になったと考えられます。

また、室町前期に揖斐川の舟運を取り仕切り、福塚城を築城した福束蔵人十郎益行にあやかり、福束になったとも言われています。

- 「仁木」は、二木から生まれました。福束輪中の一歩下手で、悪水の溜まり場でした。長い間の涙ぐましい人々の努力で、アシの生い茂る沼地から、米作りの村へと変身しました。そこから、二木に「人」がついて仁木になったと考えられます。

- 「大藪」は、大昔、川岸に大きな藪があったところから名付けられたと考えられます。『古語辞典』には、「古代の藪は、弥生であり、草や木、竹が弥がうえにも生いしげる処」とあります。また、平安期の『和名抄』に、「藪は沢の水無き処」といい、草木が密生する川岸をさし、開発前の風景をしのばせています。



※出典：切り絵（増田晴風氏作）  
書籍「西美濃おもしろ地名考」より引用

# ■海との関わりが深い地名

なんば しおほみ みる  
 「南波」・「塩喰」・「海松」の地名は揖斐川流域に拓けた集落で海との関わりが深い意味を持ち、これらの土地周辺が、昔、伊勢湾の入り江であったことを実証してくれています。

・ 享禄（1530年）の大洪水で、揖斐川の川の流れが大垣東へ変わり、上難波と下難波と村を2つに分断。輪之内町の「南波」は、陸辺と海岸線の接点にあたり、北の陸辺から見ると南の波打ち際であったことから名付けられたと考えられます。

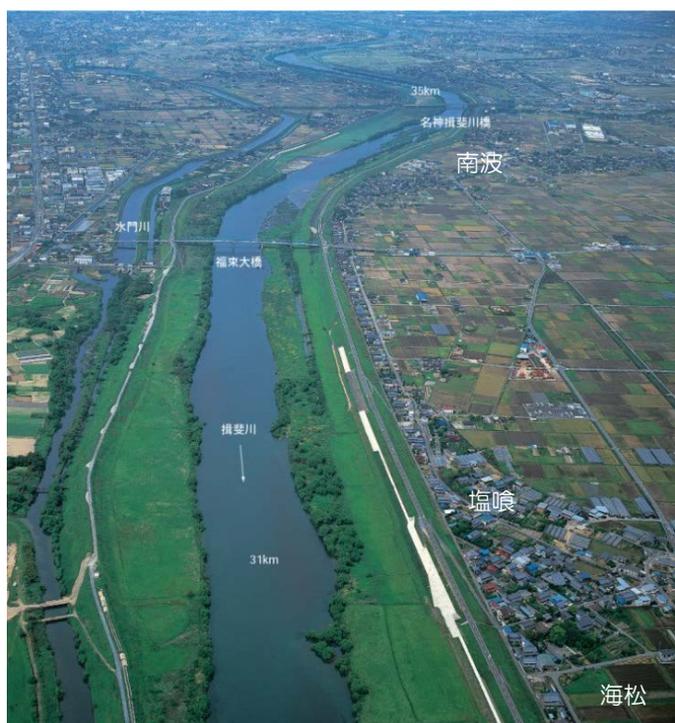
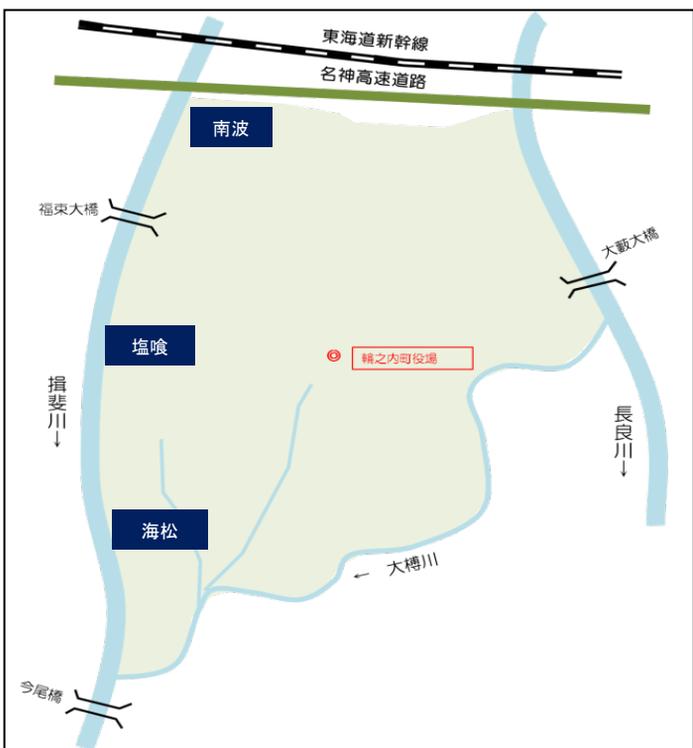
一方、大垣市難波野は、洪水の難儀な波として、昔の名残を残しています。

・ 「塩喰」とは、塩を喰むと書きます。海水の干満の起こるところから名付けられたと考えられます。今でも30cm程度の干満差があり、かつては、ボラ漁が盛んな所として土地の語り草になっています。

・ 古語辞典に「海松」とは「海草の名、浅海の岸の岩石上に着生する藻」とあることから、海苔のりに関連して名付けられたと考えられます。また、別書によれば、大樽川堤にあった松の大木を、川を往来する船頭たちは、海から見える大松として、この土地を「海松」と呼ぶようになったとも記しています。



海岸線の移り変わり （出典：ふるさと輪之内）



平成14年5月撮影

# 池・沼との関わりが深い地名

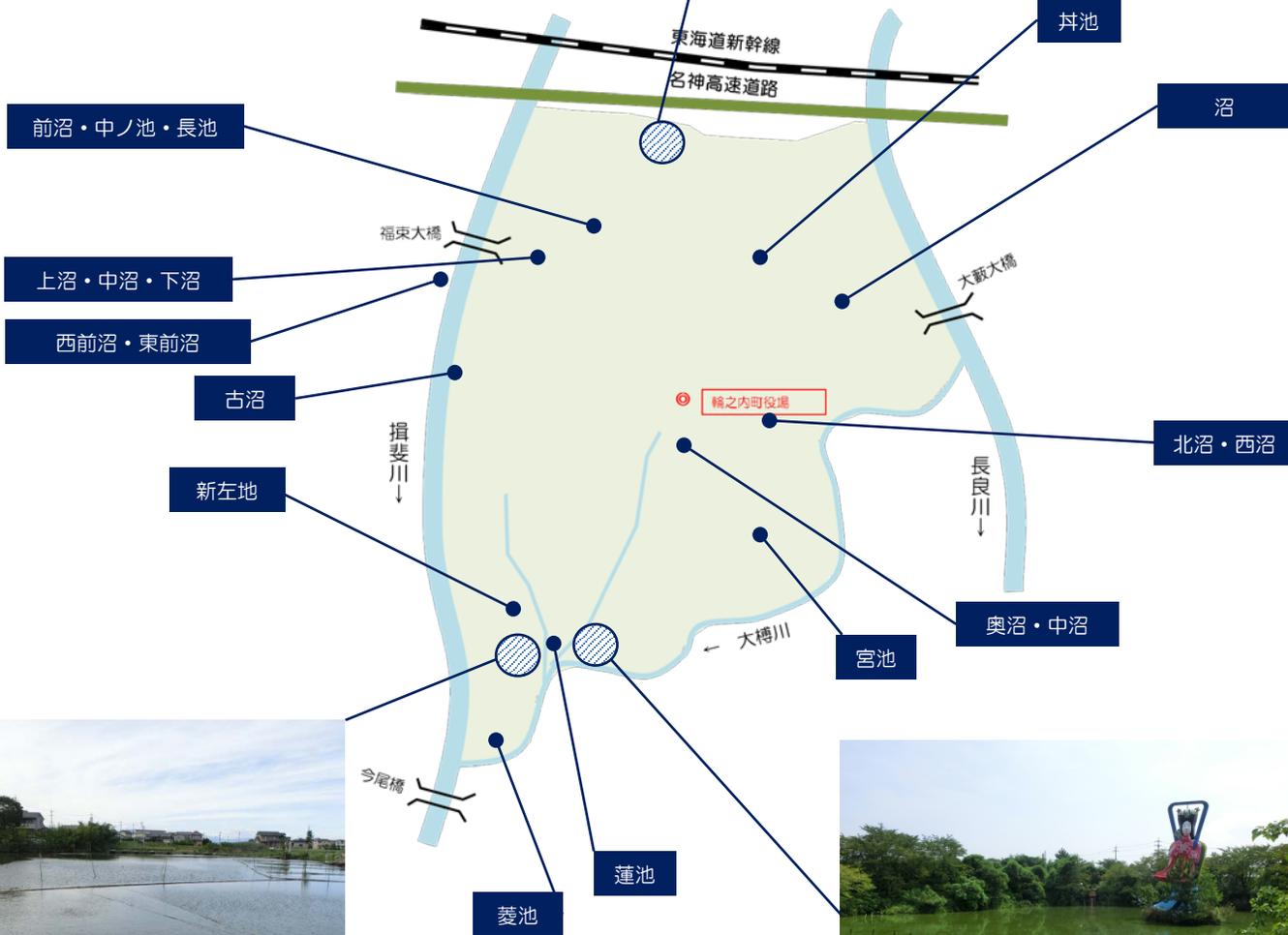
- 輪之内町は、地域一帯が低いため、池・沼の地名が多く、蓮が咲き、葦が茂っていた低湿地であったところから、  
 「中ノ池」 「長池」 「菱池」 「蓮池」 「新左地」 「井池」 「宮池」 「前沼」 「西前沼」 「東前沼」 「上沼」 「中沼」 「下沼」 「古沼」 「奥沼」 「沼」 「西沼」 「北沼」 などが名付けられたと考えられます。



高うね作りと堤防状の集落（輪之内町海松）  
 出典：「ふるさとの宝もの輪中」 平成3年撮影 河合孝氏提供



民話「片目の魚」の舞台となった「たいしょう池」



民話「ごまんの池の火の玉」の舞台となったごまんど池



民話「竜宮の話」の舞台となった乙姫公園の池

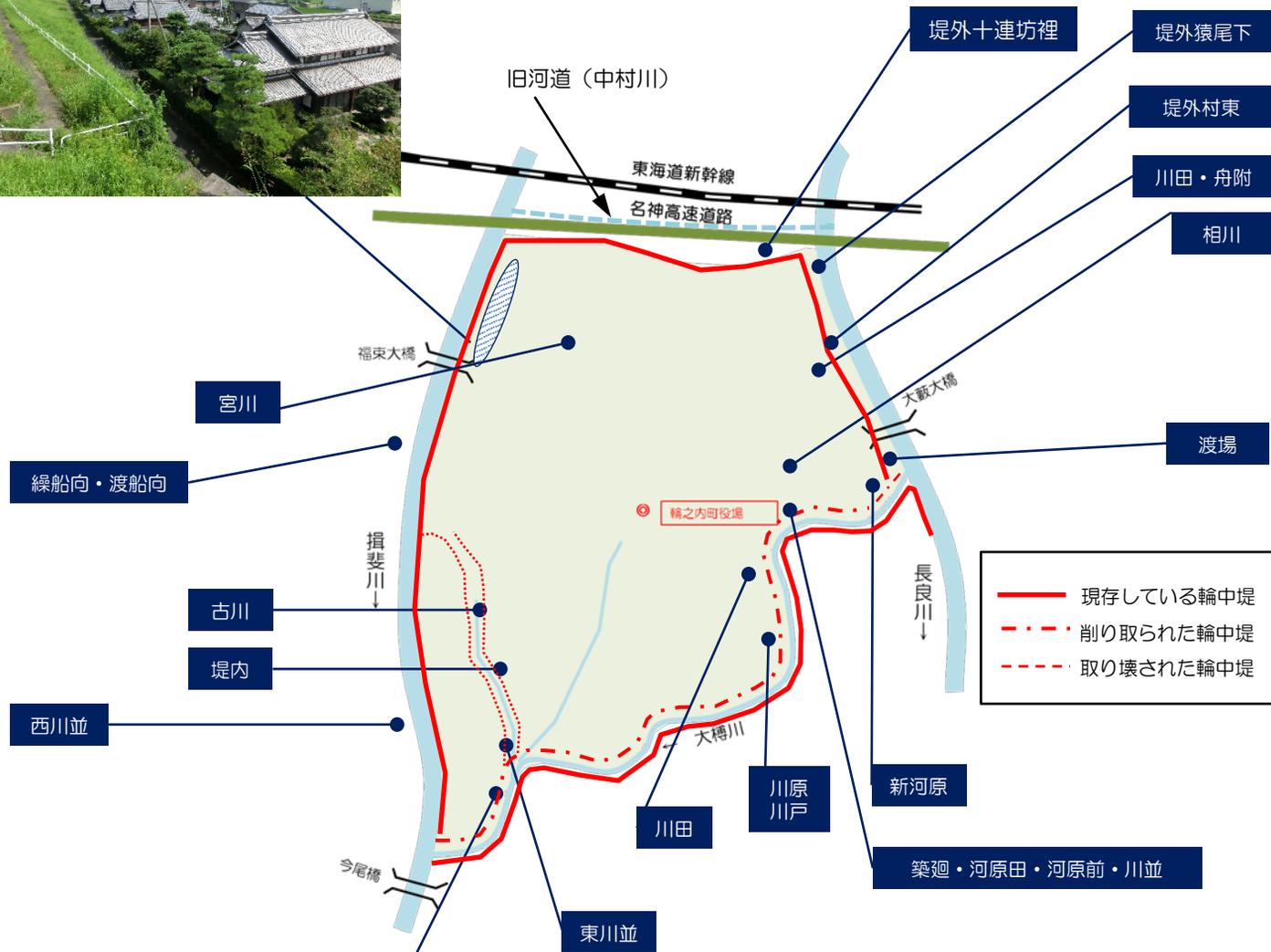
# ■川・堤防との関わりが深い地名

- 輪之内町には川に<sup>ちな</sup>因んだ、「宮川」「古川」「相川」などの地名があり、これに関連して「東川並」「西川並」「川田」「舟附」「河原前」「河原田」「新河原」「渡場」などがあります。そこでは、堤が発達し、堤を囲んだ（輪中）場合をクルワと言い、「堤内」「堤外村東」「築廻」「堤外猿尾下」「堤外十連坊裡」などがそれです。

## 【福東の列状集落】



- 明治時代の20年代から40年代にかけて、木曾三川分流工事の一環として、揖斐川の流れを真っ直ぐにするため、堤外にあった240戸のうちの150戸が、強制的に移転となり、堤防の下に沿って宅地を造った。南向きに住宅が並んでいることから列状集落と呼ばれている。



## 【本郷の水神様】



大樽川沿いに建立されている水神様。子供の水難事故が続いたため、それを心配した村人たちが、鎮魂の意味を込め、福善寺の南に水天宮と刻んだ石柱の上に小さな社がお祀りしてある。(左写真)

今から約250年前に築造された大樽川洗堰(右写真)

## 【大藪洗堰跡(新河原)】



## ■用水路との関わりが深い地名

- 輪中地帯は用排水が大きな課題です。用水は<sup>いりひ</sup>込樋によって一枚毎の田んぼに水が導かれ、また、樋門によって排水として輪中の外へ出されました。用排水に<sup>ちな</sup>因んだ地名として、「**込北**」「**上切戸**」「**中切戸**」「**下切戸**」「**溝堀**」「**水門**」「**井堰**」などがあります。

## ■洪水による破堤箇所と関わりが深い地名

- 洪水により破堤し、土砂が堆積したところが「**砂山**」と考えられます。



### 【四軒樋橋】

- 海松新田の中江川に「四間樋橋」が、西江川には「三間樋橋」が架けられている。この場所に四間樋門、三間樋門が設置されていたことに由来する。この門樋は、輪中内の悪水吐きに大きな役割を果たし、また、大樽川の増水時には逆流を防いできた。

### 【禹閘門樋】

- 輪之内町のすべての悪水が集水する所で、明治36年大樽川締切に伴い設置。紀元前2100年、中国の夏の国に禹という王様があり、黄河の治水事業を行ったことにあやかり、輪之内町の最重要の門樋に禹閘門と命名。

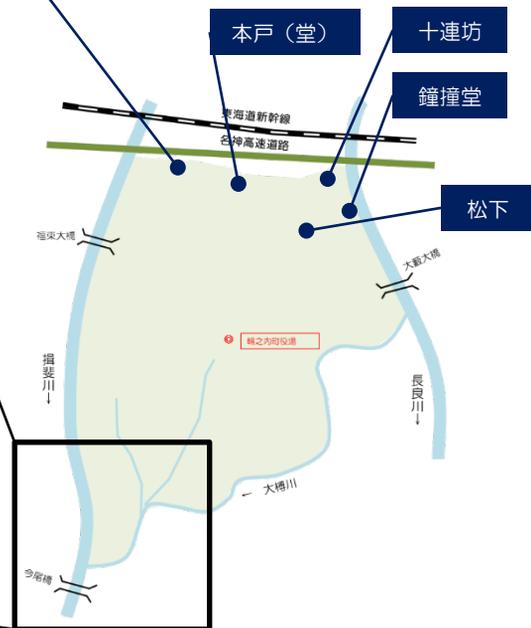
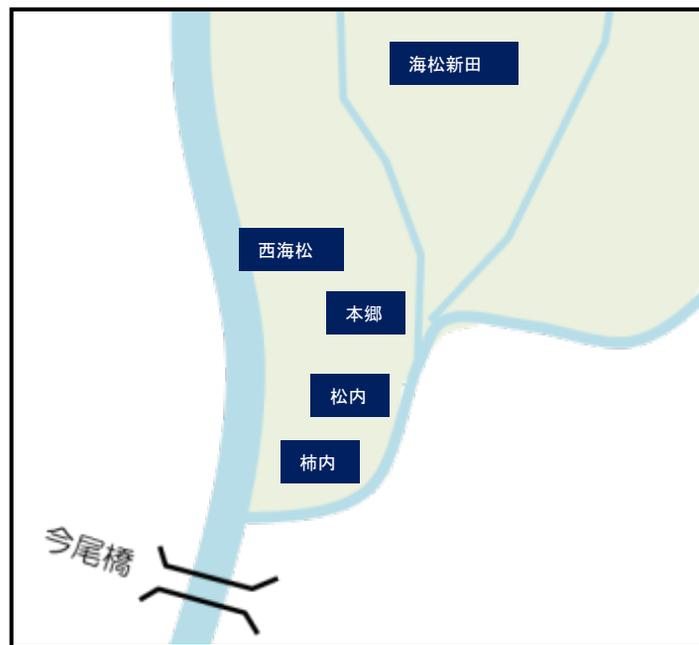


## ■その他の事例

- 「<sup>にれまた</sup>楡俣」の「楡」はヌレ（濡）の転で、「低地・湿地」を意味します。また、楡俣は楡畑の転語で、昔からこの<sup>にれ</sup>辺りには楡の木が多く自生しており、その苗を特産物としていたことから名付けられたと考えられます。
- 「<sup>ほんど</sup>本戸」は、天正16（1588）年に豊臣秀吉が市橋下総守に与えた領地目録に「本堂村」とあります。福束輪中の輪頂部は、もともと微高地で早くから集落が形成され、今でも周辺には多くの神社仏閣が建立されています。寺院内の僧の住む坊舎等が<sup>じゅうれんぼう</sup>連なり並んだ情景から「<sup>かねつきどう</sup>十連坊」、鐘撞堂があったところから「<sup>かねつきどう</sup>鐘撞堂」と名付けられたと考えられます。
- 「海松」を中心に、あとから開けた西の集落を<sup>にしみる</sup>「西海松」、<sup>ひがしみる</sup>もとの海松を「東海松」と呼び、東・西両海松を足場にして新しく開墾した土地を「海松新田」、海松新田の<sup>きた</sup>北部を「北海松」と名付けました。このように、海松が次々と発展していく上で、東海松を海松の本家、元郷（里）という意味で<sup>ほんごう</sup>「本郷」と呼ぶようになったと言われています。
- 「本郷（東海松）」と、本郷の南に位置する「柿内（垣内）」は、古くから地続きの隣りで、毎日の暮らしに深い関わりがありました。明治8年の合併集落時に、それぞれの土地の<sup>まつうち</sup>終わり一文字をとり、「**松内**」となりました。



400年余り前に、北側の中村川に沿って造られた福束輪中堤（十連坊）です。総延長2.5km、堤上巾4m、下部30m、高さ8m。



- 楡俣新田の北側の田んぼ一帯を、昔から<sup>まつした</sup>「松下」と呼んできました。関ヶ原の戦い（1600年）の1つの戦場となった輪之内町で、亡くなった武士たちを葬るために、地元の村人たちが五輪の墓を建て、その周りに数本の松の木を植えました。その後の土地改良や耕地整理で、今では、その墓や松の木も見ることができませんが、墓の周りに植えられた松の木がもつとで「松下」と名付けられたと言われています。

## ■輪中の屋敷囲は、「防風・防水」の役割果たす

- この地方には、「伊吹おろし」と呼ばれる、西高東低の冬型の冷たい季節風が吹くことで知られています。人々は伊吹おろしに備え屋敷囲いに工夫を凝らし、家屋の西側や北側の風当たりを弱くするため、ムク・エノキ・スギ・ヒノキ・ケヤキ・竹などの大きくなる樹木を植えてきました。これに対し、東側や南側はマキの生垣が多く見られます。このような屋敷囲いは、防風林の役割ばかりでなく、水害時には上流から、倒壊した家屋や立木が激流と共に流されてきて、我が家を直撃した場合の用心として、また、家財の流出をマキの生垣で防止するためのものであり、防風・防水の一石二鳥の役割を果たしてきました。



黄金色に色づく稲穂と屋敷囲い（五反郷地区 中島邸）

### 【出張所コメント】

- 過去、幾多の水禍の変遷を繰り返しながら、昭和29年に輪之内町が成立し、現在の町域を確定しています。町制施行以来、輪之内町は一度も大きな水害を受けていません。これは明治以降の近代化政策の中で実施された治水事業の成果だと考えています。その一方で、用排水の整備や戦後の土地改良事業なども実施され、輪之内町は西濃地域有数の穀倉地帯に成長を遂げました。

今回、既往文献等をもとに地名の語源を整理しましたが、これは単に古い時代の生活の姿を掘り起こすためだけに役立つものではなく、現在そして将来にわたって、この大地に足を踏ん張っていきっていく我々自身の、自然との関わり方を問い直すものと考えています。



水郷地帯の象徴「水屋」は、石垣を高く積んで、洪水の際に避難所として利用する離れ屋。

- 参考文献：「輪中集落地誌」（中澤辨次郎著 日本農村問題研究所 1936年）  
「水都大垣の地名」（大垣市地名研究会編著 大垣市文化連盟発行 2003年）  
「ふるさと輪之内」（片野知二著 輪之内町役場発行 1989年）  
「わのうち百話」（30周年記念事業委員会 輪之内町役場発行 1985年）  
「輪之内町史」（輪之内町史編集委員会 輪之内町役場発行 1981年）